第２節　歴史的環境

石川県内の遺跡（埋蔵文化財包蔵地）は総数8,150箇所が知られている。時代別の割合は旧石器・縄文時代が12％、弥生時代５％、古墳時代45％、奈良・平安時代16％、中・近世12％、時期不詳が10％を占める。七尾市には1,355箇所が存在し、県内の市町では最も数が多い。[1)]
以下、時代別の概説を述べる。

旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺跡は、県内でも発見例は少ない。能登においては、能登町不動寺公民館遺跡出土掻器や宝達志水と町の御館表採のナイフ・ブレイド、志賀町赤住遺跡群のナカノA遺跡では石器類と共に石器を製作した痕跡も発見されているが、七尾市内ではまだ発見されていない。

縄文時代においても、草創期・早期の遺跡は極めて少なく、前期初頭（約6,000年前）頃に遺跡数が増加し始める。この頃（県内では佐波式段階）は地球の温暖化が進み、現在よりも海水面が上昇した（縄文海進）時期と重なる。佐波遺跡は能登島佐波の能登島と七尾を結ぶフェリー発着場の近く、道路建設によって削られた斜面に包含されていたことから、遺跡の存在が知られ、調査が始まった。佐波式土器の特徴は、砲弾形の深鉢で水平または波状の口縁を持ち、底部は尖底・丸底が多い。文様は羽状縄文や刺突文、条痕文などがあり、内面に条痕文がみられるものもある。

他に縄文時代の代表的な遺跡として三引遺跡が挙げられる。七尾西湾、赤蔵山低丘陵裾部から平野部に位置する低湿地から縄文早期末～前期初頭に形成された貝塚が発見された。当時は遺跡の目前まで汀線が入り込む入り江状の景観を呈していた。貝層は10～30cm程度の薄層であるが、中から小動物や魚類・海獣類などの骨や貝殻、植物の種子などの有機質遺物、他には石斧・石鏃の他に約3,000個の石錘も出土している。骨角製の釣針やヤス状の刺突具も発見されており、当時の漁労活動の一端が窺える。赤浦潟を臨む台地に赤浦遺跡が存在した。遺跡の範囲は3haと推測されている。元々、地元住民には周知されており、後に研究者の知るところとなり、昭和27・28年に「九学会連合能登調査」の対象地として、万行遺跡とともに調査が行なわれた。その後、3度の調査が実施され、中期中葉上山田式から後期中葉酒見式に属する竪穴住居が3棟や土坑21基、貝塚や多くの縄文土器や石器が出土した。

弥生時代

大陸や朝鮮半島から伝播してきた稲作農耕は同時に様々な道具や技術・文化をもたらした。七尾市では、赤浦遺跡や小島六十苅遺跡で柴山出村式（弥生時代前期）の土器が出土している。小島六十苅遺跡から出土した土器は、条痕文が施された深鉢形の器形が大部分を占め、櫛歯状具による施文方法もみられないなど、非常に縄文的な要素が強い。縄文から弥生の過渡期に位置する柴山出村式Ｉ式に該当する。

七尾市内では中期に属する遺跡は少ないが、御祓川と鷹合川に挟まれた徳田丘陵（標高30～40m）上から、北陸地方で所見となる弥生時代中期（小松式）の方形周溝墓群が発見されている。方形周溝墓13基、土壙墓15基が確認され、最高所に最も大きな1号墳を配置し、計画的に造墓しており、また土壙墓には埋葬品の違いがあり階層性の存在が想定されている。

後期には遺跡数は急増する。特に後期後葉～古墳時代前期初頭に比定される遺跡が多い。二宮川流域では吉田経塚山遺跡や邑知地溝帯西側（七尾市街地西部）では国分高井山遺跡、地溝帯東側では矢田遺跡や万行遺跡などが挙げられる。矢田遺跡では法仏～月影式期のまとまった一括資料が出土しており、万行赤岩山遺跡からは床面積14㎡の竪穴建物跡から管玉原石が5個発見され、管玉製作の作業施設と考えられている。両遺跡とも、万行遺跡と近接した位置に存在している。

古墳時代

七尾市内には、多くの古墳群が存在する。万行遺跡の近辺で調査を実施した古墳を挙げると、前期には邑知地溝帯の西側北端にあたる独立丘陵に造営された国分尼塚1号墳（全長約52.5m）や国分尼塚２号墳（全長33m）[2]が挙げられ、中期には市内で唯一円筒埴輪列が確認されている矢田丸山古墳（直径約42m：円墳）[3]や続いて後期の矢田高木森古墳（全長59m：前方後円墳）[4]、海岸部の方では三室まどがけ古墳群が存在し、ヤスなどの漁具も出土している。終末期には下町院内勅使塚古墳[5]や対岸にある能登島の須曽蝦夷穴古墳[6]がある。前期から終末期まで七尾市周辺に盟主的な古墳が造営される。しかし、前期に関しては邑知地溝帯西側の国分・徳田古墳群に集中しており石動山系では千野高塚古墳のみが確認されている。万行遺跡の大型建物群の造営者及び造営者の埋葬された古墳の存在も課題であったので、周辺の古墳を踏査した際に至近の距離にある佐味今田谷内古墳群の存在を把握していた。七尾湾、富山湾に面している地形上、製塩遺跡も多く、古墳時代から古代まで製塩土器を使った塩づくりが盛んになされている。土器製塩は弥生時代末～古墳時代初頭頃に能登半島の七尾南湾に伝わったと考えられており、時代によって製塩土器底部の形式が、倒盃形から棒状尖底形、丸底形、平底形と変遷している。古墳時代の終わりには半島一円に土器製塩が拡がる。弥生時代後期から続く代表的な集落遺跡として、地溝帯西側の徳田丘陵では約24棟もの竪穴建物が検出された国分高井山遺跡（弥生時代後期～古墳時代初頭）や本遺跡にも近い矢田遺跡（弥生後期、古墳時代中・後期）[7]、長頸鏃が一括して竪穴建物から出土し、東北遠征の兵站基地と推定されている万行赤岩山遺跡（古墳時代後期）などがある。

古代（奈良・平安時代）

７世紀後半頃まで古墳が造営され、白鳳期には地方豪族が氏寺を建設する。能登国においては羽咋市の柳田シャコデ廃寺、国分寺の前身である国分廃寺が確認されている。能登国は、養老２年（718）に越前国から羽咋郡・能登郡・鳳至郡・珠洲郡の４郡が独立し、能登国となった（第一次立国）。しかし、天平13年（741）越中国に併合されるが、天平勝宝9年（757）再び分立し、能登国が成立する（第二次立国）。能登国分寺は聖武天皇が国分寺建立の詔を発してから、遅れること102年、承和10年（843）に「大興寺」を昇格させて国分寺としている。能登国分寺の調査は大正11年上田三平氏により発掘調査が行なわれ、以後市史編纂事業や史跡指定を目指した発掘調査が進められ、昭和49年に国分寺としては39番目の国史跡となる。平成4年（1992）には「能登国分寺公園」として往時の姿に甦った。平成19～23年度にかけて、能登国分寺跡の寺域を確認するための調査を実施し、寺域の西側を特定する成果があった。国分寺の周辺には、国分寺の瓦と同笵の瓦が出土している千野廃寺跡、外区に鋸歯文のある軒丸瓦が出土した小池川原地区遺跡、古府タブノキダ遺跡（７C後半掘立柱建物群）、八幡昔谷遺跡（奈良時代の倉庫群）、小島西遺跡（律令祭祀場、鹿嶋津の関連遺跡）などの遺跡が分布している。

近年、能登国分寺跡、国府推定地周辺において発掘調査が実施されており、古府ヒノバンデニバン遺跡では「市殿」と墨書された須恵器から国府市の存在が浮かび上がる等の能登国の古代の様相を知る新発見が続いている。

中世（鎌倉・室町時代）

鎌倉前期の承久3年（1221）に国衙が作成した「能登国大田文」には国内の荘園・公領（国衙領）の公田数が列記してあり、その中に万行保が記載してある。万行保は在庁官人系の武士で、国衙近傍の万行保を開発して保司となり、やがて同保の地頭に転じて鎌倉御家人に列していたと云われる。屋敷地は万行町の小字「竹端」地区に推定されている。現在の市街地周辺には中世の守護所が置かれ、応永15年（1408）に満慶を初代とした能登守護畠山氏が創設され、二代義忠時代には、度々歌会を開

催し、優れた文芸活動は評価されている。三代義統、七代義総時代に段階的に山上に七尾城が築造され、城山の山麓部に城下町が造営される。しかし、戦国時代の動乱の中、家臣の内紛もあり、天正5年（1577）に上杉謙信に滅ぼされる。その後、天正9年（1581）織田信長方の前田利家が能登国を与えられ、一時七尾城に入るが、港に近い小丸山に城を築くように普請した。天正11年（1583）には居城を金沢（尾山）に移す。

近世（江戸時代）

利家が金沢に移った後、小丸山城の本格的整備に取り組み、在城したのが利家の三兄安勝で七尾城代が続くが、元和元年（1615）の一国一城令によって翌年廃城になり、以後所口奉行所が能登の統治を引き継ぐことになる。

1）石川県教育委員会　2003「いしかわの文化財」

2）全長約52.5m、後方部一辺約28m、後方部平坦面一辺約18m、前方部幅約20m、くびれ部幅約7m、くびれ部上面幅約5.5mを測り、高さは後方部の南側で約3.8m、前方部東側で約3mである。前方部は低く、細いくびれ部から前端部にかけて大きく広がるタイプである。埋葬施設は墳丘築造過程において造成した構築墓坑で痕跡から長さ約4.7m、幅約1mの割竹形木棺が安置されていたと考えられる。特殊な例として棺床を取り囲むように木組みの配置がされていた。墳丘の後方部平坦面及びくびれ部から供献された土師器がまとまって出土しており、時期は古墳時代前期初頭の古府クルビ式の新段階に属する。棺内からは多くの副葬品が出土しており、特に北半分に集中していた。「夔鳳鏡」や異形勾玉（ヒスイ製）、管玉、鉄刀、鉄短剣、鉄槍先、靫、銅鏃、鉄斧、鉄槍鉋、ヤスなどが出土している。前方後方墳の形式を採るが、長大な割竹形木棺を採用し、銅鏡や多数の銅鏃を服装するなど、畿内大和勢力との密接な関係が指摘される一方、独自の内部構造を有している点が注目される。
１号墳の北側に並んで2号墳が造営される。全長33m、後方部一辺約18m、前方部幅約11m、後方部高さ約3.5m、前方部高さ約１m。埋葬施設は、簡素な木棺直葬で小型倣製鏡（国産鏡）、管玉20点、ベンガラ、小型鉄片が副葬されていた。
七尾市役所 2002『新修 七尾市史 1 考古編』

3）正円形プランをなす復元全長42m、高さ7.5mを計る大型円墳。現状は、道路や民家によって墳丘裾部は削平を受け、崩落などもみられる。1969年に墳丘実測と墳丘斜面での埴輪・葺石などの確認調査を実施しており、埴輪片約30点を採取・発掘している。主体部は未調査。5世紀後半頃の造営で高木森古墳に先立つ盟主墳として位置付けられる。　七尾市役所 2002『新修 七尾市史 1 考古編』

4）海岸線に平行して台地の先端部に位置する。1958年明治大学考古学研究室と石考研によって共同調査を実施。復元全長59m、後円部径34.5m、同高さ約7m、前方部前端幅21mで後円部との比高差約2.5mの古相を示す。段築・葺石・埴輪は未確認。主体部は盗掘を受け、副葬品は発見されなかったが、墳丘のトレンチからは須恵器の杯蓋や丁寧に波状文を施した壷や装飾器台が出土。
矢田古墳群は七尾市域最大の古墳群であり、その盟主的存在と考えられている。

5）市街地の南西約6kmの距離にある。能登国造の墓と考えられ、江戸時代には既に開口しており、石棺や副葬品は伝わっていない。1969年に市史編纂事業で墳丘及び石室の実測、周溝のトレンチ調査を実施し、一辺約23mの方墳で幅約6mの周溝が確認されている。高さ3.7m。石室全長11.84m、玄室長4.62m、同幅2.50m、同高さ2.0m。墳丘は盛土を互層にして叩き締める版築工法によって造成される。時期は7世紀第Ⅱ四半期。　七尾市教育委員会 1985『院内勅使塚古墳』

6）七尾湾を望む丘陵上に位置する。7世紀中頃に築造された方墳で、一辺が東西18.65m、南北17.05m を測る。墳丘には雄穴（T字型）、雌穴（逆L字型）と呼ばれる2つの横穴式石室が併設されており、板石がレンガ状に積み上げられ、天井は隅三角持ち送り技法のように築造されている。遺物は鉄鏃・ほぞ穴鉄斧・象嵌円頭大刀、鉄釘、須恵器などが出土している。
能登島町教育委員会 2001『史跡　須曽蝦夷穴古墳 Ⅱ』

7）万行遺跡の東南方約1kmの水田地内に位置する。1985年に圃場整備事業に伴い、Aトレンチ（幅３m、長さ240m）、Bトレンチ（幅3m×長さ168m）の２本設定し、計1,300㎡の発掘調査をした。幅約５mの小河川下層から出土した木器や土器は出土状態から一括性が高く、弥生時代後期後半の基準資料となっている。他に古墳時代中・後期の資料も出土しており、中でも特筆すべきものに陶質土器が挙げられよう。天井部に綾杉状の刺突文が施された有蓋高杯の蓋や外面に擬格子叩き目、内面に同心円文がかすかに残る甕胴部片などが7点出土している。朝鮮伽耶地域の影響を大きく受けた土器で能登では他に発見例はない。かほく市指江遺跡で陶質土器が発見されている。

第１図　周辺の遺跡（S=1/100,000）

表１　周辺の遺跡地名表

No.	遺跡No.	遺跡名	所在地	通称	種別	現状	立地	時代	出土品	備考
①		佐味今田谷内古墳群	佐味町	イマダヤチ	古墳	山林	丘陵尾根	古墳後期	須恵器、土師器、ガラス玉、鉄刀茎、長頸鏃	1：前方後円墳(29m) 2：円墳(30m) 3：円墳(11m)
②	02082	細口源田山遺跡	細口町 八幡町	ゲンダヤマ	集落跡 墳墓	宅地 山林 自動車学校	台地	弥生中期後半	土器、管玉、石鏃	方形周溝墓、土壙墓、竪穴。 1977年 自動車学校建設の際発見。
								奈良平安		
								室町	土師器、須恵器、珠洲焼、灯明皿	
③	02205	矢田遺跡	矢田町		散布地	宅地 田 畑 道路 工場	平地	弥生前期末～中期初頭・後半、後期後半	有孔円板形石製品、土器	
								古墳後期前半	土師器、須恵器、木器カマド型土製品、韓式系土器	
④	02210	万行赤岩山遺跡	万行町	アカイワヤマ	集落跡	宅地 畑 道路 公園	微高地	縄文前期後半	土器	竪穴、掘立柱建物。
								弥生末～古墳前期	土器、管玉、砥石	
								古墳後期	土師器、須恵器、長頸鏃	
⑤	31052	吉田経塚山墳墓群	吉田町	キョウヅカ山	墳墓	山林	丘陵尾根	弥生 古墳 南北朝室町	土器（甕）、勾玉、管玉、ガラス玉、 土師器（甕、壺、高杯）、土器	台状墓墳頂に溝と石組みによる中世祭祀遺構あり。
⑥	33102	机島１号墳	中島町 瀬嵐		古墳	山林	台地	古墳前期初		前方後方墳（全長 18m）。
⑦	32084	大槻 11 号墳	中能登町 大槻		古墳	山林	丘陵	古墳前期初	土師器	前方後方墳（全長 27.7m）。
⑧	02088	国分尼塚墳墓群	国分町	アマヅカ	古墳	山林	台地	古墳前期末	＜棺内＞鞆、銅鏃、鉄鏃、鍬先、鉄斧、鉋、ヤス、銅鏡、勾玉、管玉、直刀、鉄剣、鉄槍 ＜棺外＞鉄槍、漆製品	前方後方墳（長 52.5m） 木棺直葬（木組施設あり）、周溝。
		国分尼塚１号墳								
⑨		国分尼塚２号墳						古墳前期末	銅鏡、管玉、鉄器	前方後方墳（長 33m） 木棺直葬、周溝。
⑩	02109	藤橋ゼニガミネ古墳	藤橋町	ゼニガミネ	古墳	山林	丘陵頂	古墳中期	刀子、須恵器甕	円墳（径 40m）
⑪	02092	国分高井山古墳群	国分町		古墳	山林 砂利採取場		古墳中期	鉄矛、直刀、鉋、鉄斧、砥石、須恵器、滑石紡錘車、銅鏡、鉄器	円墳３基 方墳２基
⑫	02021	花園丸山古墳	花園町	カミツカ マルヤマ	古墳	畑 荒蕪地	丘陵斜面	古墳中期	土師器壺底部	円墳（径 47m、高 6,4m）、二段築成。 円墳（径 13m、高 1m） 円墳（径 10m、高 1m）
⑬	02032	白馬ナブラ山古墳	白馬町		古墳	山林	丘陵	古墳後期	須恵器（甕、提瓶）、土師器（把手付椀、長頸壺）	円墳（径 13.5m、木棺直葬）
⑭	02200	矢田丸山古墳	矢田町	マエガワ	古墳	社地		古墳中期	円筒埴輪	円墳（径 32m、高 7.5m）、復元径 42m、1969 年一部発掘調査。
⑮	02206	矢田高木森古墳	矢田町	ネコヅカ	古墳	社地 雑林	微高地	古墳後期初頭	須恵器、土師器、石室用材	前方後円墳（長 58m）、竪穴式石室か。
⑯	02050	温井 15 号墳	町屋町		古墳			古墳後期前半	＜棺内＞刀子、鉄鏃、ガラス玉 ＜墳丘＞鉄斧、須恵器	前方後円墳（長 16.8m、後円径 10.8m）、木棺直葬。
⑰	33078	中島ヤマンタン古墳群	中島町 中島	ヤマンタン（不動滝古墳）	古墳	山林	丘陵端	古墳後期	土師器、須恵器、鍬先１、鎌１、直刀片４、金環２、刀子５、切子玉５、管玉０、ガラス勾玉５	墳丘割平 円墳（径 8m、高 0.8m）。 横穴石室の石材集積。
		中島ヤマンタン１号墳（ハリ塚古墳）								
		中島ヤマンタン 31 号墳		シモ			丘陵		金銅製鞘止具、鍔付直刀１、直刀７、刀子８、鉄鏃 13、方形鉄板１、ガラス小玉８、緑色凝灰岩小玉 186、朱、人骨片、須恵器（蓋杯、高杯、平瓶、壺、はそう、提瓶各１）	円墳（14m、高３m）。 横穴式石室（玄室長 7m、幅 1.5m、高 1.3m）。
⑱	02025	院内勅使塚古墳	下町	チョクシヅカ	古墳	公園	微高地	古墳終末期	須恵器（杯蓋、杯身、高杯、はそう）	方墳（辺 23.4m、高 3.5m）、二段築成、横穴式石室（長 11.8m）。
⑲	02230	三室まどがけ古墳群	三室町	マドカケ	古墳	山林	丘陵尾根	古墳後期	鉄鏃、管玉、ガラス玉、刀、刀子、馬具類、酸化鉄、人骨、金環、銀環、須恵器、土師器	円墳（径 20m）、横穴式石室（長 9m、両袖形）、玄室北側壁に線刻。
		三室まどがけ１号墳								
		三室まどがけ２号墳				公園	丘陵尾根	古墳後期	刀子、弓金具、ヤス、釣針、耳環、空玉、鉄鏃、須恵器、土師器	円墳（径 12m）、 横穴式石室（長 5.5m、無袖形）。
		三室まどがけ３号墳				公園	海岸	古墳終末期	耳環、須恵器、土師器	円墳、横穴式石室
⑳	35064	須曽蝦夷穴古墳	能登島 須曽町	エゾ穴	古墳	史跡公園	丘陵	古墳終末期	土師器、須恵器、鉄製銀象嵌円頭大刀、ほぞ穴鉄斧、刀子	方墳（東西 21m、南北 17m）、横穴式石室２基（雄穴T字形、雌穴逆L字形）。